特集●十五〜十八世紀ネーデルラントとオランダ美術における複製／コピー

緒言

青野純子

本特集は、二〇二三年三月四日に明治学院大学にて開催されたシンポジウム「十五〜十八世紀ネーデルラントとオランダ美術における複製／コピー」における講演内容を元に執筆された論文四編から成る。シンポジウムは、企画者である青野が研究代表を務める科研基盤研究C「農民画礼賛：十八世紀国際絵画市場におけるオランダ絵画趣味と蒐集」（JP17K02317）の主催、そして明治学院大学文学部芸術学科及び明治学院大学言語文化研究所の共催により、白金キャンパスにおいて開催され、オンラインでの同時配信も行った（シンポジウム詳細は後掲載）。

複製とコピーをめぐる問題をシンポジウムのテーマに選んだのは、二〇一七年から取り組んだ上記の科研プロジェクトの中で、受容研究における複製作品の重要性を強く認識したためである。プロジェクトの課題の一つは、十八世紀の国際絵画市場において、十七世紀オランダの画家アドリアーン・ファン・オスターデの農民画が人気を博した理由を考察することであった。調査を進めるなかで浮き彫りなったのは、ファン・オスターデの農民画の複製作品が油彩、版画、水彩素描と異なる媒体で数多く制作され、それらが国内外に普及することで、オリジナル自体の評価が高まり、さらにはその素朴な日常の情景がオランダ絵画の典型として称賛されるようになったことである。

そこでシンポジウムの開催にあたり、複製／コピーの特殊な機能、なかでもオリジナルの絵画の意味と評価を刷新していくような複製行為、またその時代における文化的・社会的・政治的・宗教的な価値観の形成に積極的に関わるコピーのあり方を考察することを主眼とした。また、ネーデルラント、オランダと呼ばれる地域で育まれた美術には、時代により程度が異なる

ものの、視覚世界を忠実に再現しようとする態度、そしてそれを可能にする高度な技法の探究が見いだされる。こうした芸術的な土壌においては、「対象を写す」という複製行為が新たな作品を生み出す創作行為とも重なりうる、交差しうるのではないかと考え、地域をネーデルラントとオランダに限定し、十五～十八世紀という長い期間における多様な複製のあり方を分析対象とした。

ただし西洋美術史においては、複製／コピーに焦点を当てた研究が常に関心を集めてきたわけではなかった。とりわけ十九世紀以降、西洋美術におけるオリジナリティの偏重は、長い間、巨匠と呼ばれる画家の作品のコピーを亜流・副産・周縁――時には贋作や偽作――として過小評価する状況を生み出してきた。が、近年の西洋美術研究においてはオリジナリティの概念自体が修正を迫られ、コピー作品の持つ特有の機能と価値にもまた学術的関心が高まってきている。例えば、二〇一八年に出版された*Making Copies in European Art 1400-1600*[1]と題された論文集の序文の中で、ピーター・M・ルークハートは、「複製という行為そのものは、一人の芸術家をもう一人の芸術家と対話関係（競争関係）におくということであり、事実、ひとつの創作行為である」と述べている。

実際に複製という行為は、同じ媒体、例えば油彩で油彩画を複製する場合には、一人の画家が他の画家の創作過程を厳密に理解して再現する、いわば追体験する試みでもある。そして油彩画を異なる媒体に複製する場合には、その媒体の特質を最大限に活かして、他の画家の創作を「翻訳」する作業になる。そして作品を複製する際には、その対象がヤン・ファン・エイクの精緻な細部描写であれ、レンブラントの闊達な筆致であれ、そこには必ずオリジナルとの差異、ずれ、誤解が生じる。それを技術的な限界、未熟さ、不完全さとし、オリジナルからの忌むべき逸脱として捉えることもできる。が、実際にはそこにこそ、複製行為が「創作行為」である理由があるのではないか。オリジナルとコピーとの間に生まれる差異には、技術的な限界だけでなく、制作者がどのようにオリジナルを視覚的に認識し、理解し、そして何を最も魅力的、最も重要だと考えていたのかという、個々の制作者の解釈と評価が現れてくるのである。その認識や判断は複製制作者が活動した芸術的、社会的、経済的な状況にも左右されるだろう。そして、こうした複製がオリジナルとは別の空間で鑑賞され、時に数多く流通することで、複製作品がオリジナル自体の価値や意味に影響を及ぼしていく可能性もあるのである。

シンポジウムでは十五～十八世紀それぞれの世紀を代表する作家たちの複製／コピーに関して研究発表が行われた。時代によりコピーの制作方法、制作意図、受容者、鑑賞方法などが異なることが浮き彫りになり、コピーの特徴と機能をめぐる様々な問題について多様な角度から考察することができた。そして

参加者とともに行った議論のなかで再認識したのは、オリジナルを起点にコピーがそこからどれだけ離れているかという距離に注目するのではなく、ベクトルを逆に向け、コピーからオリジナルへと働きかける作用とその効果を考察することの重要性であった。本特集がそうした複製をめぐる新たな議論に貢献できれば幸いである。

今井澄子氏、廣川暁生氏、深谷訓子氏にはシンポジウムの趣旨にご賛同いただき、多忙のなかご講演を賜り、さらに本特集にご寄稿いただいた。記して深く感謝の意を表する。

註1：Maddalena Bellavitis ed., *Making Copies in European Art 1400–1600: Shifting Tastes, Modes of Transmission, and Changing Contexts*. Leiden/Boston: Brill, 2018.

【執筆者紹介】（寄稿順）

今井澄子［大阪大谷大学文学部歴史文化学科教授］
慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程満期修了。博士（美学）。専門は十五～十六世紀ネーデルラント美術。近年はネーデルラントの地を支配したブルゴーニュ公の自己表象について研究を進めている。単著に『聖母子への祈り――初期フランドル絵画の祈祷者像』（国書刊行会、二〇一五）、監修・編著に『天国と地獄、あるいは至福と奈落』（ありな書房、二〇二一）、『ネーデルラント美術の宇宙』（ありな書房、二〇二〇）、『ネーデルラント美術の精華』（ありな書房、二〇一九）、共編著に『移ろう形象と越境する芸術』（八坂書房、二〇一九）、論文に"The Iconography of Coins in the Reign of Philip the Good, Duke of Burgundy," (*Kyoto Studies in Art History*, vol. 3, Forthcoming) など。

廣川暁生［明治学院大学ほか兼任講師］
お茶の水女子大学大学院博士課程満期退学。ベルギー政府給費留学生としてブリュッセル自由大学で美術史を学ぶ。Bunkamuraザ・ミュージアム学芸員（二〇〇八～二〇二〇年）。専門は十六～十七世紀ネーデルラント美術。近年はポスト・ブリューゲルの画家たちの風景表現の展開について研究を進めている。主な共著は『版画の写像学』（ありな書房、二〇一三）、『ブリューゲルへの招待』（朝日新聞出版、二〇一七）、『天国と地獄、あるいは至福と奈落――ネーデルラント美術の光と闇』（ありな書房、二〇二一）ほか。
主な担当展覧会：「ウィーン美術史美術館蔵、風景画の誕生」展（二〇一五年）、「ベルギー奇想の系譜　ボスからマグリット、ヤン・ファーブルまで」展（二〇一七年）など。

深谷訓子［京都市立芸術大学美術学部総合芸術学科准教授］
京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（博士（文学））。専門は十六～十七世紀のネーデルラント美術。近年は、オランダの画家たちによるイタリア絵画受容のほか、ハプスブルク・ネーデルラント総督の美術政策やコレクションについて研究を進めている。単著に『ローマの慈愛「キモンとペロー」の図像表現』（京都大学学術出版会、二〇一二）、共著に『カーレル・ファン・マンデル「北方画家列伝」註解』（中央公論美術出版、二〇一四）、最近の論文に"Spanish patrons of the Utrecht Caravaggisti in Italy"（*RKD Studies: Going South*, 2023）など。

青野純子［明治学院大学文学部芸術学科教授］
慶應義塾大学大学院文学研究科修士、東北大学大学院国際文化研究科博士課程満期修了。アムステルダム大学博士。専門は十七～十八世紀オランダ美術。近年は十七世紀オランダ絵画を模写した十八世紀オランダの複製素描と絵画市場について研究を進めている。単著に*Confronting the Golden Age: Imitation and Innovation in Dutch Genre Painting 1680-1750* (AUP, 2015)、共編著に『移ろう形象と越境する芸術』（八坂書房、二〇一九）、共著に『ネーデルラント美術の光輝』（ありな書房、二〇一七）、最近の論文に"Kunstenaars op de veiling: tussen zakelijkheid en bewondering"（*Kunst, kennis en kapitaal: Oude meesters op de Hollandse veilingmarkt 1670–1850*, Walburg Pers, 2022）など。

【シンポジウム詳細】

「十五～十八世紀ネーデルラントとオランダ美術における複製／コピー」

日時：二〇二三年三月四日（土）　十三時～十七時三十分
場所：明治学院大学　白金キャンパス本館二階一二五五教室
主催：科研基盤研究C（JP17K02317）（研究代表：青野純子「農民画礼賛：十八世紀国際絵画市場におけるオランダ絵画趣味と蒐集」）
共催：明治学院大学文学部芸術学科、明治学院大学言語文化研究所

プログラム：
13時～13時15分　開会挨拶・趣旨説明：青野純子

〈第一部：十五～十六世紀〉司会：深谷訓子
13時15分～14時　今井澄子（大阪大谷大学教授）
ロヒール・ファン・デル・ウェイデン作《フィリップ善良公の肖像》の複製と「ブランド」をめぐる一考察
14時～14時45分　廣川暁生（明治学院大学他兼任講師）

ピーテル・ブリューゲル（父）作《スケート滑りと鳥罠のある冬景色》の受容をめぐるピーテル二世のコピーの果たした役割についての一考察

14時45分〜15時　休憩

〈第二部：十七〜十八世紀〉司会：今井澄子

15時〜15時45分　深谷訓子（京都市立芸術大学准教授）
アダム・エルスハイマー作品の複製とその作用

15時45分〜16時半　青野純子（明治学院大学）
色と光を描く――十八世紀オランダの複製素描とピーテル・デ・ホーホの評価をめぐる一考察

16時半〜16時45分　休憩

16時45分〜17時半　ディスカッション（モデレーター：青野純子）